

『内から湧き出る joy』 ～ 隅の首石 ～

2024 年 2 月 18 日は【『東久留米がん哲学外来(13:00～15:00)』(2008 年スタート)と『読書会(15:30～17:30)』(2007 年スタート)】に赴いた。

『東久留米がん哲学外来』(代表:小林真弓氏)は、CAJ(クリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン)のキャンパスで行なった。筆者は、個人面談の時が与えられた。初めての参加者も居られた。Wife は、クッキーを作り持参した。愛情豊かなスタッフの皆様には、ただただ感謝である。2008 年『東久留米がん哲学外来』と一緒にスタートした吉川研一氏と風早謙一郎氏も、今回参加して頂いた。まさに、原点回帰の時となった。

『東久留米がん哲学外来』の後、東久留米駅前の『イースト サイド カフェ & ダイニング』での読書会に向かった。筆者は、英文で書かれ、現在でも世界に誇る名著とうたわれる【『代表的日本人』[内村鑑三(1861～1930)著 鈴木範久訳、岩波文庫]と『武士道』(新渡戸稲造著 矢内原忠雄訳、岩波書店)】(画像)を交互に 2007 年から毎月、参加者と音読しながら進めている。新渡戸稲造著『武士道』&内村鑑三著『代表的日本人』を熟読玩味する時である。

今回の読書会の箇所は、【『武士道』[新渡戸稲造(1862-1933)著 矢内原忠雄(1893-1961)訳、岩波書店]の第1章『道德体系としての武士道』】であった。野澤登美子氏が音読を担当された。徹夜で、練習されたことであろう！

『武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である』&『小さい子をいじめず、大きな子に背を向けなかった者、という名を後に残したい』&『偉大なる規模の道德的建築を建てうべき隅の首石であること』が 今回の学びとなった。人間は自分では『希望のない状況』であると思ったとしても、『人生の方からは期待されている存在』であると実感する深い学びの時が与えられている。『読書会』は『表面的な happy』vs『内から湧き出る joy』の違いの考察の時ではなかろうか！ 終了後は、『イースト サイド カフェ & ダイニング』の隣のインド料理ルチラで、夕食の時をもった。大変有意義な貴重な日となった。

『三浦修道院は広い敷地で、大きな部屋』もあり『広々とした三浦海岸』も眺められるので、小学生が 1 泊の機会があれば、マザー・テレサ (Mother Teresa, 1910-1997; 1979 年ノーベル平和賞受賞) の学びの時ともなろう。

武士道

新渡戸稲造著

矢内原忠雄訳



「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である」——こう説きおこした新

渡戸（1862 - 1933）は以下、武士道の淵源・特質、民衆への感化を考察し、武士道がいかにして日本の精神的土壤に開花結実したかを説き明かす。「太平洋の懸橋」たらんと志した人にふさわしく、その論議は常に世界的コンテクストの中で展開される。



青 118-1
岩波文庫

揺らぐ日本を思い、骨太に読み切る

代表的日本人

内村鑑三 著
(岩波文庫)



推薦者：樋野興夫氏
順天堂大学医学部病理・腫瘍学講座教授
NPO法人がん哲学外来理事長
「21世紀の知的協力委員会」議長

がん細胞から人の生き方を学ぶ。そしてがん患者をはじめとした人間との対話。それが樋野興夫氏の実践するがん哲学外来だ。全国各地で講演会やメディカルカフェを開き、闘病する患者や家族、医療関係者などがやってくる。

樋野氏は、がん細胞を観察・研究してきた病理医だが、それとともにおそらく国内でも屈指の内村鑑三、新渡戸稲造らの研究家であり、実践家である。何しろ患者との対話で次から次へと紡ぎ出される言葉の数々は、それら内村鑑三、新渡戸稲造らの著作にある一文、一文を血肉としてきたものなのだ。

「若いころから恩師に、毎日寝る30分前には医療と関係のない書物を読みなさいと言われ、実践してきた。もう40年になる」

樋野氏が持参した内村鑑三著の「代表的日本人」を見てみると、行間は樋野氏がかいたボールペンの文字で埋め尽くされている。読書しながら思索を重ねてきた証だ。色が違っているのは、読み込んだ回数を表している（写真参照）。

「代表的日本人」は、果てしなく西欧化の道を突き進む明治期にあって、西欧の真似をする日本とは何なのか。それを受け入れてい

る自分とは何者なのか。——。そう自問自答した内村鑑三が、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人という5人の偉人の生涯を紹介しながら、日本的な道徳や倫理の美しさを切々と説く。初版は英文で発表され、各国で翻訳された。

「東日本大震災や原発事故を経て、日本という国自体が揺らいでいる。そんなときだからこそ、ぜひ読んでほしい1冊だ」

内村鑑三だけではない。1933年3月、三陸で地震の大災害があった。被災地である宮古市などの沿岸部を訪れた新渡戸稲造は、惨状を目の当たりにし、「協力こそが力なり」と語ったとされる。

「まさに今に生きる言葉である。今、新渡戸稲造が生きていれば同じ行動、同じ発言をし

ただろう」と樋野氏は言い切った。時は違えども、現在の状況は、内村鑑三、新渡戸稲造が生きた明治中期に似ているようだ。そのと

きに、日本を愛い、生き抜いた思想家たちの片りに触れ、自らの生き方を見つめ直す。そんな骨太な夏であってもいいかもしれない。

